

是彼會員

# 風まかせ

## 〜リヤカー放浪旅〜

中川啓造（会員）



「最後はどこに行くか」と問われ、「墓場」とその方は答えていました。この会話は、今回の主人公「田中清（仮名）」さんが、僕の携帯電話を借りて十数年振りに昔の友だちと交わした会話の最中、面白いなと感じ

た言葉を取り上げた次第です。田中さんとの出会いは、ほんの偶然から始まりました。

「善隣」2018年11月号にも書いた「宇和島シーズンワーク」ボランティアで行った、今年度2回目の作業後、地元の吉田公民館で「ボランティアの集い」があり、終了後外へ出ると、隣の公園に変わったものがあり近寄って行きました。

何とそれはリヤカーに小屋をくっつけたものでした。窓からのぞくと、男の人が繕い物をしているのを見掛け、声を掛けました。「コンニチワ」「ハイ、コンニチワ」「これは何ですか」「リヤカーに手製の小屋をくっつけて旅をしているんだ。2018年6月10日に新潟を出発して日本海側から九州を回り、フェリー

で四国の八幡浜へ2日前に来て、今日ここに来たんだ」。

なるほど小屋に張ったトタン屋根には、出発点の新潟から始まり、富山、石川、福井、京都、兵庫、鳥取、島根、山口、関門フェリー、福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、宮崎、九四フェリー、愛媛と続き、これから向かう高知が書いてあります。その脇には包丁研ぎ1本三百円、仮りの宿、借りの宿、蚯蚓屋（ミミズヤ）と続いています。

以前、民放のテレビ放送で、元高校教師が「田吾作号」と名付けたリヤカーに世帯道具一切を積み込み、世界を旅行しているのを見たことがありました。

「包丁研ぎをやっているんですか」と聞くと「年金は月3万円あるが、全部カアちゃんに取られて旅する資金がないので、頭をひねってさほど道具、技術がなくてもお金が増える方法としてこれを思い付いたんだ。最初は1回一百円としていたが、お客から安過ぎると言われ、字を足して二百円、三百円となっ

てきたそうです。「普通は五百円が相場だな」。

宣伝は、屋根に書いてあるのみなので、「なかなかお客が集まらなく、1日の生活費の目標1000円には到達しない」と、淡々と話されました。ですから出発したとき用意したお金が段々食い込んで厳しくなってきた、という話を聞いたので、「このミカン農家に知り合いがいてアルバイト先があるかもしれないので、聞いてあげようか」と言ったら、「頼む」という話からとんとん拍子になり、知り合いのミカン農家に電話したところ、さっそく彼が軽トラックで飛んできて、話がまとまりました。

僕は彼の人生に興味を引かれたのですが、宇和島から去る日が明日に迫り、帰る準備に迫られて時間がなくなり、やむなく後ろ髪を引かれる思いでその場を去りました。

年が明けて落ち着いたところ、宇和島の知り合いのミカン農家に連絡を取ったところ、「まだいるよ、ミカンの収穫作業が一

段落する2月中頃までいそうだよ」と言われ、それじゃあ彼に会いに行こうか、という気になり、飛行機を手配して2月6日宇和島に1週間行くことになり、僕が滞在している間は留めておく、ということの話がまとまりました。

生活拠点Mポートと銘打った一軒家が確保されており、彼もずーっとそこで生活していたので、僕も転がり込んで共同生活が始まりました。日中、清さんは馴染みになったミカン農家へ働きに行き、僕は知り合いのところへボランティアとして足を運んで過ごしました。朝、晩は同じ屋根の下で生活していたので、色々と話し込みました。

生まれは北九州市の若松区で工業高校卒業まではそこで過ごし、卒業後日本板硝子の京都工場へ1年4か月勤め、そこが合わないということに辞め、北海道へ行き牧場をいくつか転々として4年過ごされたそうでした。

に行動し、ポーランド籍の貨客船に乗客12名の内の1人として乗船し、香港、シンガポール経由でインドにて下船したそうです。インドでは、ビザの関係で1年を過ごし、国内のあちこちを旅行したそうです。そして、陸路でパキスタン、アフガニスタン、イラン、トルコを経由して欧州に入り、ギリシャではレストランでアルバイトをしながら1年以上を過ごしたそうです。

都合4年を海外で送った後、途中知り合ったヒッピーから伊豆山中で自給自足の生活を送っているところを紹介され、25歳から住みついたそうです。

同棲していた彼女とも途中で別れ、山中で一人住まいをし、30歳になったら自力で茅葺きの家ならびに囲炉裏をこしらえたそうです。電気、ガス、水道なしの現代文明の恩恵を受けない仙人に近い生活を送っていたそうです。ただまるっきり原始生活を送るわけにもいかず、必要な現金は里へ下りて頼まれ仕事

同じ牧場で知り合った9歳年上の女性と同棲した結果、一緒

をして稼いだ、とのこと。そうこうしているうちに物好きな若い女性、現在の奥さんに当たる人が現われ、縁があって結婚したそうです。伊豆の山中には18年住んで、それから奥さんの実家がある新潟の田舎に越してきてから早や18年過ぎたそうです。新潟では実家の水田を借りて稲作をして米を作り、畑では野菜も作り、食料は自給自足していたそうです。それでも現金が必要なため村では他の農家の手伝いをして日銭をとるとき稼いでいたとのこと。お子さんは6人で、うち5人は順調に育ったそうですが、6番目の子どもが病弱で半年を経ないで亡くなったそうです。6番目の子どもさんとの対応で奥さんとぎくしゃくとなり、それが現在でも尾を引きずって夫婦間がしつくりいかなくなり、清さんが60歳のとき、奥さんから「あなたの老後の面倒はみない」と宣言されたそうです。

これは、僕の独断と偏見の推量ですが、妻がいい年をした夫

に対して子どもにも接するよう

に口うるさく口を挟むことに嫌気が差し、また生来の放浪癖から「リヤカー放浪旅」に出たのではないか、と思われます。この旅の終わりは、本人によると、俺ないしはリヤカーが壊れるか、もしくは恋に落ちるかだとのこと。それからリヤカーの屋号になっっている蚯蚓は、自分に適した生存環境があればどこへでも動いて行くそうなので、それから名前を取ったとのこと。

僕は人相を観るのが趣味なのですが、最初にお会いしたときに蚯蚓に似ているな、と直観しました。正直な話、僕も清さんに同じ匂いを感じたので引かれた、と思います。

おしまいに、僕の敬愛する食生態学者、西丸震哉先生の名言、「カンオケに入ったとき やりたいことは かなりやったな」と ニンマリ出来る 自分でありたい ネェ あんた？」を結びの言葉とします。 合掌